

ベトナム中部における少数民族のくらしの変遷と今後の発展の方策

高木 佳子

キーワード：地球環境、ベトナム、少数民族、小規模養蜂、国際協力、生業支援、内発的発展論

1. はじめに

ベトナムは、1987年のドイモイ（刷新）政策実施以降、経済発展を続け2010年には（低位）中所得国となったが、依然として山間僻地にくらす少数民族の貧困率及び生活レベルの改善には課題が残っている。ベトナム政府が行っている山間地に暮らす少数民族支援政策の多くは、平野にくらす多数派民族のキン族に追いくための近代化を促すものであった。「近代化」自体は、くらしに物質的、利便性の向上をもたらすものであり、先進国と途上国問わず多くの人々の目指すところである。しかしながら、先進国内における諸問題、先進国と途上国の絶対的格差は見る限り、貧困と弱者に係る課題は「近代化」だけでは解決できないこと明らかな状況にある。そこで、歴史的固有性、地域的固有性に着目するものとして、「内発的発展論」の視座を検討したい。体系的に内発的発展論を取り上げた鶴見和子は、近代化を否定せず、地域を発展の単位とし、固有の自然生態系へ適合、文化遺産（伝統）に基づいて外来の知識・技術・制度など照合し、自律していることを目指とした上で「多様な発展を切り開くのは、キー・パーソンとしての小さき民である」とした¹⁾。そこで本研究では、少数民族集落の生業支援活動とキーパーソンとなりうる住民たちの取り組みやくらしの変遷を明らかにし、内発的発展論の視点から発展の方策を考察する。

2. 調査方法

京都大学大学院地球環境学堂がJICA草の根技術協力事業においてベトナム中部トゥアティエン・フエ省丘陵地にある少数民族集落で実施した小規模周年養蜂活動を事例とし、養蜂活動を実施した集落のくらしの変遷に係る聞き取り調査と養蜂技術指導役であった兼業農家への聞き取り調査を行った。

3. 結果および考察

伝統的に森の恵みに依拠した少数民族のくらしは、ベトナム戦争やベトナム政府の政策変更により大きく変化し、ゴムやアカシアといった人工林の拡大はくらしを世界市場に左右されるものとしていた。一方で、平野にくらす多数派民族のキン族を含む集落外の人々との関わりは依然限定的で、集落内や同じ民族の間で濃密な人間関係を維持していた。近代化を受入れながら自律したくらしを目指すには、市場価格に翻弄されるリスクを緩和する複数の生業が必要であり、その選択肢として自ら蜜源に移動することなく行われる周年養蜂は、アカシア林の花の蜜といった未利用の自然資源を活用する潜在性のある生業であった。周年養蜂の技術は少数民族と同じ丘陵地にくらすキン族の兼業農家が培っており地域の在来知であった。兼業周年養蜂家と少数民族世帯を外部者が結び付けることで、養蜂技術は初期段階の移転を果たすことができたが、販売段階に課題があることが明らかになった。

内発的発展論の視点からは、周年養蜂が自律したくらしへと導く可能性を指摘できる。しかし、そのためには、販路の構築が不可欠であり、同じ丘陵地にくらしながら出会うことがなかった兼業周年養蜂家と少数民族集落の養蜂活動参加世帯を外部者が結び付けたように、生産物への価値付け及び質の向上、販路の構築を公正に行える外部者の関与が求められる。生産から販売までの流れを定着させる中で得られる小さな成功体験が、地域のキーパーソンを生み出し自律したくらしにつながると考える。

¹⁾ 鶴見和子（1989）。「第2章 内発的発展の系譜」鶴見和子、川田侃（編）『内発的発展論』東京大学出版会、49頁